学会発表

マンモグラフィと超音波検査の併用受診で超音波検査が有効だった乳がん症例

発表者　福地芙美
共同研究者　榛葉　陽子　榊原　明日香　原田　真衣　石垣　みのり
長谷川　百香　中島　信明　古賀　震　中上　和彦

【はじめに】

日本人女性が罹患する癌で最も多いのは乳がんであり、年間約10万人が罹患している。乳がんの好発年齢は40歳代後半と60歳代後半と言われ、女性のがん死亡数順位を見ると大腸・肺・膵臓に次ぐ第4位で年間15,000人ほどである。乳がんはステージⅡまでに発見できれば5年生存率は95.5％、10年生存率は90.4％である。早期に発見できれば死亡数の減少が見込まれ、乳がん検診では早期発見が望まれている。

現在、対策型乳がん検診ではエビデンスのある検診方法としてマンモグラフィ検診だけが推奨されているが、J-STARTでは乳腺濃度が高いと考えられる40歳代で超音波検査との併用受診の有効性が検証された。乳腺濃度は個人差があり50歳代以上でも高濃度乳房の方もいて、年齢だけで分けるのは不可能である。

われわれの施設ではマンモグラフィの読影は認定医によるダブルチェックで、がん発見率は0.36％であり全国平均の0.3％と同等である。

今回マンモグラフィで悪性所見がなく超音波検査で所見を認め、精密検査後乳がんと診断された症例を経験したので報告する。

【対象・方法】

2017年４月から2022年３月までの５年間で、4,410人がマンモグラフィと超音波検査の併用受診し、乳がんと診断されたのは56人だった。このうちマンモグラフィのカテゴリーが１または２の良性判定だった８症例を検討した。

【結果】

８例のマンモグラフィで発見が難しかった原因は、マンモグラフィのブラインドエリアによる描出不能が１例、小さな浸潤癌が４例、石灰化を伴わない広範囲な非浸潤性乳管癌（DCIS）が２例、自覚症状があるも検診として受診しマンモグラフィでは明らかな所見を認めなかった１例である。

【結論】

マンモグラフィだけでは検出できない癌があることを含め、乳房超音波検査という選択肢もあることを周知していきたい。人間ドック施設においては全年齢層を対象にマンモグラフィと乳房超音波検査の併用受診による乳がん検診が望ましいと考える。

第64回　日本人間ドック学会学術大会（2023年９月２日、群馬県）にて発表した。